

岐阜日日新聞主筆聾者 小木曾旭晃氏(1882-1973)について

愛知県一宮市：桜井強 deaf@naa.att.ne.jp

●小木曾旭晃の略歴

明治15年	1月15日、厚見郡細畑村小木曾彦八の長男として出生（本名周二）
明治21年(7)	細畑村立日彰尋常小学校入学
明治24年(10)	10月28日、濃飛大震災で家屋倒壊
明治27年(13)	校庭にて遊戯の過失から耳の鼓膜損傷、中枢神経マヒのため全聾となる。 小学校6年中退。
明治28年(14)	あらゆる医療も効なく、煩悶苦悩、読書によって僅かに慰む。
明治30年(16)	「漢和字典」と「いろは字典」を師とも、友ともして一切他人の教えを受けず独学、この頃より修二を通名として使用。（身を修むという意味から）
明治31年(17)	名古屋の青少年雑誌「文壇」に短文を投稿、はじめて自作の文章が活字になる。旭晃の文名次第に揚るまま遂に文筆を以て身を立てんと決意。
明治34年(20)	文学雑誌「東天紅」発行。地方文壇に存在を認めらる。
明治36年(22)	名古屋二葉会発行の雑誌「天使」記者に招かる。東京博文館の「中学世界」臨時増刊の懸賞文で一等に当選（賞金5円）
明治37年(23)	日露戦争始まる。父の胃病悪化のため帰郷、雑誌「新文芸」発行。
明治38年(24)	新文芸を「山鳩」と改題。
明治40年(26)	名古屋の扶桑新聞岐阜支局記者として岐阜付録編集担当。
明治42年(28)	扶桑新聞支局閉鎖のため退社。秋西濃印刷会社に入社し、教育新聞創刊。11月安八郡下宮村山川まつゑと結婚。
明治43年(29)	「山鳩」廃刊。「地方文芸史」出版。
大正2年(32)	「河鹿」創刊。11月岐阜市神田町1丁目に岐阜通俗図書館を開設経営担当。教育新聞編集と兼務。
大正8年(38)	経営中の図書館隣家よりの出火で類焼、貴重なる資料を焼失は千秋の恨事。
大正9年(39)	岐阜日日新聞入社、編輯主任。
大正11年(41)	平和記念博覧会見物を兼ね、最初の東京見物。
昭和2年(46)	岐阜日日新聞編集局長に。
昭和7年(51)	自叙伝「逆境に苦闘して」出版。
昭和12年(56)	日支戦争始まる。新しく文化勲章制定。
昭和14年(58)	「地方文芸史」再版。
昭和15年(59)	東京在住の友人知己の厚意により第2回東京見物、滞在4日間（目黒雅叙園で歓迎会） 戦時統制令により教育新聞廃刊、32年の誌歴に終止符、感慨無量。

昭和16年(69)	大東亜戦争始まる。戦時統制令により岐阜県内の日刊新聞三種を岐阜日日新聞に統合「岐阜合同新聞」と改題。
昭和17年(61)	岐阜合同新聞に10ヶ月「岐阜県偉人伝」と題し258名の伝記を連載。
昭和19年(63)	「濃飛興唾風土記」を130回連載。8月4日、母90才にて死亡。
昭和20年(64)	5月、新聞非常措置令により、県下に頒布される新聞紙は毎日新聞、朝日新聞等岐阜合同新聞に一括統合さる。
昭和21年(65)	岐阜合同新聞を「岐阜タイムス」と改題。7月、月刊総合雑誌「地方文化」創刊。
昭和22年(66)	言論関係で公職追放となり岐阜タイムス退社、勤続28年。
昭和25年(69)	4月、地方文化を「生活と文化」に改題。
昭和26年(70)	6月、公職追放解除、老齢のため職に就かず。
昭和28年(72)	生活と文化編集所を岐阜市加納沓井町に移す。岐阜県聴話障害者福祉協会の名誉会長に推薦さる。
昭和30年(74)	11月生活と文化100号記念特集号発行。
昭和33年(77)	1月「濃飛風土記」出版。3月、ヘレンケラー賞を受く。5月、大阪県人会総会に招待を受けて出席、清友会同人の歓待にて3日間大阪と奈良見物。12月、「岐阜県の偉人」を出版。
昭和36年(80)	1月、「逆境の恩寵」を出版。
昭和39年(83)	3月、生活と文化200号記念特集号発行。
昭和40年(84)	5月、勲四等瑞宝章を拝受。岐阜日日新聞東京支社主催で、虎ノ門晩翠軒にて歓迎会。
昭和41年(85)	10月、日本新聞協会の新聞大会へ特別招待さる。
昭和47年(91)	7月、生活と文化300号発行。11月、東海テレビ賞を受く。
昭和48年(92)	4月8日、岐阜公園に文学碑建設さる。 10月26日老衰のため死去。法名文珠院釈旭晃。

参考文献：旭晃偲び草（非売品）

● 小木曾旭晃の誕生から失聴までの生い立ち

明治15年1月15日、岐阜県厚見郡細畑村に生まれ、父の名は彦八、母はひさの、長男として誕生した。本名は周二であるが、15、6歳のころ自分勝手に「修二」を使用し始めた。兄弟は男の子は旭晃1人で、ほかに妹3人あったが、2人死亡し1人。細畑という土地柄は、昔、中仙道の古駅で、有名な一里塚があった地区。旅人が歩き疲れて一里塚までたどりつき茶店に腰掛けて煙草入から煙管を抜き出し、刻み煙草を詰めて一服と休んだ所である。大正時代まで続いた。小学生時代の彼は、相当の腕白であった少年。成績は中位だった。

● 聴力失聴

高等科2年生（小学校6年生）の時、校庭で学友とマラソンをして、誤って友の肩と旭晃の頭が激突した調子に、旭晃の頭がガンと鳴りめまいして倒れた。一時的に回復したが、寒い日であったためかその翌日より風邪気味で発熱し、耳が少し痛んでいた為、耳鳴りがあり、蔵前の堀源之助という医師の診察を受けたところ、中耳炎らしいとのことで、同医師の薦めにより岐阜県病院へ行って診察を受けたが、その頃の岐阜県病院はまだ耳鼻咽喉科はなく、外科医の診察では完全とはゆかぬらしく、少し聞き苦しくなった耳の故障はなかなか治らず悪くなる一方であった。自宅から病院までには一里余

(約4キロ)遠い為、病院通いも大変だし、人力車では費用に困るといったから、1ヶ月ほど通っただけで中断したが、その頃は甚だしい難聴になっていた。耳の鼓膜が破損した上、中耳炎の原因で耳の中樞聴神経がマヒ状態になったから全聾となったもので全治の見込がないとのことであった。難聴だから先生の話も友達の声も十分分からない。傍へ来てよほど大声で聞かれても、ただ変な顔するばかりで不得要領のため、先生は苦笑、学友は爆笑で、何一つ取り付く島もないから全く無駄であった。毎日がこんな調子では学校へ行っても無意味であり、学問はとて見込みがないと言われ、退学のほかならないに至った。ツンボになった身はまるで暗夜に灯火を失ったようで、日常の不便不自由はいうまでもない。第一に話し合うには簡単なことは手真似足まねでどうにか要領を得るにはしても少し複雑した事はどうしても筆談意外には方法がない。田舎少年としてはそのような聾啞教育には恵まれず、カナ程度の簡単な筆談によってどうにか話ができるくらいで、不便不自由はいうまでもない。筆談に慣れぬものや筆談を面倒くさく思うのは、よほどの場合は話し相手にならないから、こちらも沈黙のほかなく孤独感のさびしさに味気ない日を送った。

● 全聾の完治方法により、祈祷医者ざらえ

旭晃は、たった1人の男の子であり相続人であり、将来に望みをかけてかけた旭晃が、いかに災難とはいえ、生れもつかぬ片輪になったとはあつては、あきらめようとしてもあきらめられない痛恨事であった。わが身に代えても治るものなら治してやりたいという一念から、費用と労力を惜しまず医師に診療を受けるより、神仏に祈願はもとより果てはいかがわしい加持祈祷まで、絶えず苦勞した。おそらく両親は旭晃の耳のためには日夜苦悩で、家業に精出すことも出来なかった。生活も苦しく借金もあった。旭晃の父がわが子の病氣回復の熱願がいかに強かったかと分かる。怪祈祷師の浜口熊獄が、メクラが目を開いたとか、いかなる難病も治すとかの噂で大評判でロコミを広がり、岐阜市某院へ来て、行列が並んでいた。医者でも治らぬ旭晃の耳が祈祷師の一喝祈祷で聞こえるようになるわけではないから高いお金が払ったにも関わらず、父が失望した。

ただ黙々と家へ帰った。

● 煩悶苦悩の日送り

16、7歳ともなれば、どうにか物事も分かる年頃である。今のようにろう学校のある時代ならば、その学校へ入って学問もできるし将来の職業も教えてもらえるのであるが、当時には名古屋や岐阜にそのような学校がなかったからである。名古屋ろう学校では明治34年ですし旭晃は20歳になる。岐阜ろう学校では昭和6年ですし旭晃は50歳になる。何としても少し学問を勉強したと思っただ、明治の中期はまだ漢学の全盛時代で小学校の教科書なども難解の漢字が多くて難しかった。古本屋から漢和字典といろは辞典の2冊を80銭で購入し、分からぬ漢字や事はらすべてこの2冊の辞典で調べて勉強した。この2冊は旭晃の唯一の師であり、友でもあった。結局は五十歩百歩で普通の人と比べて2倍3倍も努力したとの事でした。

● 東天紅・天使・新文芸時代

17歳の時、少年としては少し字が上手であつて、岐阜市裁判所前の代書人野村為一と僕の父と親しかったので、旭晃を筆生に使用してくれた。仕事は毎日毛筆で訴訟や登記の書類を作成する傍ら筆蹟上達に効果があった。そのころ書生仲間が、名古屋で発行している「文壇」という青少年向けの小雑

誌を講読していたが、何らかの文筆の素養も自信もなく、手始めに「金華山に登る記」という五、六十行の幼稚な短文を送ってみた。まだ原稿用紙や万年筆などのない時代で、基盤目の敷紙の上に薄い半紙を当て、毛筆で一字一句丁寧に清記した。文章は拙劣でも原稿が綺麗のためか特別採用されたものらしくともかく初めて活字になった。その喜びと得意はいうまでもなく何度も読み返して読むのが楽しみであった。投書に熱中するにしたがい、小雑誌に自分の名が目立つようになり、誌友と文通が次々に出来て、楽しみの一つが増えた。

● 新聞記者志願失敗

ある日、岐阜日日新聞に見習記者募集の社告が出たので旭晃の心を動かした。旭晃は23歳になり、文才も自分免許だが相当のつもりである。名古屋の雑誌編集の経験も積んだから新聞記者になることは必ずしも不可能でないと思った。早速、志願の旨手紙を出した所、来社されたいとの通知が来て、岐阜日日新聞社へ行き、通知のハガキを受付へ差し出すと、指定の応接室へ案内され、志願書に自分は耳が不自由であるというようなことは書かなかったのも、やがて筆談で「記者入用というのは外交方面のもので、たとえば警察とか裁判所とかを回って取材したり、県庁や市役所その他へも出入せねばならないから、君のような耳の聞こえないものは全然駄目である。内勤の校正とか整理見習いとかは役立つかもしれないが、今のところは募集がないのでせっかくだから悪しからず」との事。記者志願の成功はもとより期待してなかった。前もって両親にも相談せず誰にも内密で行ったのであるから駄目だったとは別に気にしてなかった。

● 文筆生活の第一歩

新聞記者志願が駄目だったのは、自分の才能不足にほかならない。自宅で絹織物製造の手伝いをしながら雑誌編集の仕事をしていた。

● 待望の新聞記者実現

明治38年ごろ、日露戦争に大勝した日本は、好況時代を現出して新聞界も活気をし、名古屋の親愛知と名古屋新聞は岐阜県進出のため、岐阜に支局を設置し岐阜版を発行した。そこで名古屋の扶桑新聞も追従的に岐阜支局設置となり、岐阜版編集に扶桑本社へ旭晃の旧友高木竹涙が旭晃を推薦してくれたので入社を決意した。時は明治40年の春である。旭晃は編集を担当。扶桑新聞は経済方面に特色があって、他二紙ほど大衆受けせぬため発展性がなく、岐阜進出も予期ほど効果がなくそのうちに名古屋の本社が改革となり、岐阜支局も廃止となった。旭晃は月給1ヶ月分の退職金をもらい、浪人となった。

● 岐阜日日新聞へ入社

岐阜日日新聞の整理主任だった武藤貞一君が新愛知へ転社し欠員となったので後任にどうかの話があった。予て懇意な宮脇朝民、田中精一の二君に相談したところ入社歓迎とのことで、社長匹田鋭吉氏の了解を得て、大正9年1月4日付正式に入社、翌日から編集を担当することになった。既に扶桑新聞で経験があったからである。当時の岐阜日日新聞は経営難の時代で社員も少なく、日曜も休日もなしというわけで、毎日雑文を書くという重労働であった。編集長は田中君が昭和2年に脳出血で急逝した為、宮脇君が後任となったが、半年ほどで旭晃がその後を継いで局長となり、編集兼発行人の署名も旭晃にして、名実共に編集の全責任を負うことになった。法規に触れぬよう相当に気苦労があっ

た。特に特高警察の注意を受けたこともあり、名誉毀損だとか新聞紙違反だとか何だかとうるさい問題が持ち上がり、警察や検事局憲兵隊に厄介かけたこともあった。たいていにいつ形式的の始末書程度で済ませた。

● 言論関係で追放

昭和22年12月25日旭晃にも言論関係で公職追放命令が来た。(解除は4年後の昭和26年6月)戦時中の昭和16年5月17日付の岐阜日日新聞で、人道主義から戦争の罪悪を論じた反戦論を書いて、憲兵隊の警告を受けたほどだが、旭晃は反戦論者であるとその掲載紙を添えて異議を申し立てたが、当局としては満州事変以来の新聞社幹部などは、追放の方針だったので反戦もヘチマもあつたものではなく、追放を食らわせた。旭晃なんかの反戦論は価値もなしで葬り去られたが、岐阜日日、岐阜合同、岐阜タイムスを通じて追放になったのは旭晃1人で、何だか罪を一身に引き受けたように感じた。追放となつてから無為徒食のほかから生活上困つたので、70歳の老齢では就職も無理のため閑日月を送るのほかなく「地方文化」という雑誌を退屈しのぎの意味で発行することになった。

● 岐阜県聴話障害者福祉連合会名誉会長に就任

昭和28年5月31日に岐阜市京町公民館において岐阜県下各地の代表者100名余参加、発足記念講演とし、「ろうあ者諸君よ、積極的に進め」という題で講演された。(通訳は土井久吉氏)

● ヘレン・ケラー賞受賞

昭和33年3月「濃飛風土記」を出版したが、これらの著書を通じてヘレンケラー賞を受けたのは旭晃の最後を飾るもので光栄とする所であった。ヘレンケラー賞は往年岐阜聾学校の平松兼五郎校長が推薦され一度受賞候補者になったが「濃飛風土記」出版を期とし、更めて当時の校長寺町輝雄氏らの推薦によって、青鳥会本部の審査をパスした。

ヘレンケラー賞

小木曾修二殿

あなたは余儀なく負わされた運命とは云え全聾という逆境に立ってよく其障害を克服されました。五十年間のあなたの文化的な業績は世人をして刮目させるものがあります。常人といえどもなお成し難い諸種の社会教育事業或は自ら筆を執って社会教育の啓蒙に努め特に郷土文化に残された数々の著書は特に将来に向つて光り輝いていますしかもこれらの業績は今日その前途に一抹の憂いと不安をいだく全国十余万の聾者に無限の希望と光明をもたらすものと確信します本会はこの輝やかしいあなたの業績と努力に対し深くこれを讃えここに本年度ヘレンケラー賞を贈って表彰いたします。

昭和33年3月28日 財団法人 青鳥会 理事長 竹内虎士

小木曾旭晃の経験雑話

●筆談によるテスト（口頭試問よりも的確）

旭晃は岐阜日日新聞時代に十余年の永きにわたり、編集局長をしていたが、時々記者志願者があって、採否には試験などという四角張ったことはなく、前以て面識あり性格や才能などの大体わかっているものは別として、さもないものは履歴書を持参させて旭晃がテストして採否を決することになっていた。これは岐阜日日新聞社匹田社長が記者採否を旭晃に一任されていた。旭晃のテストはなかなか適切で正確であるという事で好評。そのテスト方法は、志願者を応接室に来て「僕は耳が聞こえぬから話は一切筆談である、よって僕の問に対し一々筆答してもらいたい」との前置きし、記者志望の理由、家庭の事情、趣味及び得意、棒給の希望額などを聞き、新聞記者というものは君らが想像するほど愉快な仕事ではなく苦勞の多いこと、大新聞社とちがって勤務時間が長く、しかも安月給であることなどを話し、それでも差し支えなければ考慮すると云って回答を求めると、相当しっかりした人物だと私の出した鉛筆と紙を取り上げて一々筆答するが、グズだとただモジモジして鉛筆を持ってもなかなか答弁せないものがある。こんなグズ助は文句なしの落第である。しかし、一々筆答しても悪筆とか遅筆とかでは一考を要するし、普通の文句で誤字や脱字があれば学力の程度がわかってこれも落第である。達筆で文章も整っており態度が快活で如才なさそうなものは適任者として採用する基準。口頭試問のような皮相の考査よりは遥かに的確である。

●耳学問と目の学問

同じ漢字でも読み方の違うものが沢山あるため、旭晃のような耳学問のできぬものには間違ふことが多い。これは主として漢字の煩わしさからくるもので、今さらどうすることもできないが、時には無知か無学かのように誤解されることなきにしもあらずであるから、その一例を示してみる。岐阜県中津川市へ越県合併問題で粉糾した長野県西筑摩郡山口村の島崎藤村の出生地として有名な馬箆は、文字からすれば必然的に「ウマカゴ」と読みそうだが、それが「マゴメ」であるなど、いずれも文字と実際との食い違つて耳慣れた人には馬箆も言葉の上からはすぐわかるが、旭晃のような文字にのみ依存するものには簡単にわかるものではない。その一例であつて、漢字を正直に文字通り解説しても、世間に実際通用する言葉と一致せぬものは多々あるわけ。視力ばかりで解釈する事柄が、耳学問の人から笑われることが多いとて必ずしも非常識とか世間知らずとか云うことは出来ないである。このように耳あり目ある完全な人間と目はあつても耳のない身では何事につけても競争は不可能でないにしても太刀打ちは並大抵の努力ではできないからその労苦にひとしおであることはもちろんである。したがって旭晃のように学問とか知識とかは人並にあるにしても、世間に暗いとか案外非常識だと笑われても仕方がない訳である。けれども前記のような漢字の複雑性と耳学問の不可能であることに卒倒すれば、大して恥とするにも及ぶまいと自問自答することもある。おそらくこの点は誰にも諒してもらえらると思う。

●旭晃を偲ぶ寄せ文に引用

私は小木曾先生を世界一の新聞記者、世界一の言論人、世界一の文筆家、世界一の文化人であると信

じている。否信ずるところではない、信仰とまでなっている。わたしが世界一の新聞記者と信ずる理由はまず第一に、先生が聾者である事だ、少年時代ふとした事から耳が聞こえなくなってしまったのだ。それで氏は聴覚から得る学問でなく、視覚から得る学問即ち読書の学問で今日の博学達識とされたのだ。新聞記者の武器はまず第一に耳でなくてはならぬ否生あるものみな耳が必要だ。その聴覚を奪われた先生がこの苦しい難関を突破して、よく困難な新聞事業に関係して大成され主筆編集長の重責を完遂された偉大な努力こそ、私が世界一の新聞記者と言う所以である。第二に先生が世の中の事を人からラジオから聞かずに目による学問で偏る事なく正しく批判して講演されるあたり凡人のわざではない。第三に先生が聴覚の不自由からすべてを文筆によって表される事である。すべての対談は筆談である、すべて筆に親しまなければならぬこれが執筆となり著書となるわけである。第四に私が先生を世界一の文化人と言う所以は三十年以前先生が岐阜日日新聞の編集長であり私や高田君、原君、高橋君、河村君などが若手記者当時の事である、社の棲上で編集会議を開いた事がある。その席上小木曾先生は開口一番、新聞社にはラジオを設置せねばならぬ。今なんと言うても近代文化はラジオからである、ラジオと言うものは世界中のニュースや学芸、政治や政党の主張等を刻々に放送して国民の耳に速報するものだ、新聞は目から送るニュースであり、ラジオは耳から送るニュースだ、であるから新聞社にラジオを設置して日々刻々のニュースを集めねばならぬこれが新聞社として先決問題だと提案され、なみいる連中をアツと言わせた事がある、小木曾先生自身は必要のないラジオであるが耳のある私達の考え及ばぬこの卓説には傾聴させられた事がある。この一面から見て当時すでに立派な文化人であったことを物語るものである。私が先生をして世界一の新聞記者、世界一の文化人と信仰するのも当然である。まったく世界中にツンボの新聞記者と言うものは1人もなく寡聞にしてまだ聞いた事がない、私はこの世界一の小木曾先生を師とした事が幸福であり名誉と考えている。

● 耳の有無珍問答

これは一月下旬のある日、代議士野田氏が拙宅へ来訪された時の話。野田氏曰く。先日一万田蔵相がアメリカの最新科学による補聴器を求められたが、これは人体の骨を通じて難聴が聞こえるようになっておるそうだから、貴下もアキラメてしまわず一度実験されてはどうか。とのこと、これに対し旭晃は答えた。難聴程度の人には適当かも知れぬが耳の中樞神経がマヒした全聾の私にはおそらく何らの効果もないであろう。仮りに効果があつて私の耳が急に聞こえるようになったとしたら、むろんうれしいには相違ないかも知れぬ。しかし旭晃は今年77才だ、いくら頑張ってもアト十年はとてむずかしい、おそらく数年が関の山かも知れぬ。六十余年を耳なしの静かな世界で暮らして来た身で、三年や五年自由の世界に生れ変わったとしても大した喜びとはならない、むしろ雑音騒音に脅かされて後悔するかも知れぬ、やはり死ぬまでこのままの耳なしである方が却って幸福だと思うがどうです。と云ったら、野田先生大笑して肯かれた。

● 弔辞

岐阜県知事 平野三郎

小木曾さん、私はいまあなたの霊前に立ち、心から深くあなたの他界を悼むとともに、失ふものの大きいことを悲しむものであります。あなたは幼少の頃、ふとした事故がもとで全聾となりましたが、持前のずばぬけた記憶力と直感力に加えて、努力と精進で文筆活動に生涯を捧げられました。かつてのヘレンケラーに勝るとも劣らないその努力と精進は、数多くの身障者にも大きな自信と勇気を与えるもので、私ども深く敬意を捧げてまいったところであります。明治、大正、昭和三代にわたり、内外とも多難な時代の新聞雑誌界にあつて、よくその信念を貫かれ、いつの時代にあつてもよく平静さを失われなかったことは、あなたをとり巻く多数の有識者のひとしく語っておられるところであります。また戦後総合文化誌「生活と文化」を発刊され、老令にもかかわらず原稿収集から、編集校正に至るまで独力で行なわれた責任感の旺盛さには敬服の至りであります。他界される直前まで、その数実に三百十五号をたゆまず刊行され、この仕事を通じて地方文化界の動向に深い関心と支援を示されたことは、万人の知るところであります。あなたの不屈の精神と人柄をたたえて建てられました、文学碑の除幕の式典が去る四月桜花舞う岐阜公園で行なわれた際、あなたはみなさんのお力で私の最後の花道を作って下さったと感慨を述べられましたが、今更ながらその光景が印象深く思い出されます。あれから半歳、あなたは安らかに大往生をとげられましたが、ご生前のいく多の功績は今後いよいよその実を結び、末永く伝えられることでありましょう。本日ここで親族のかたがたをはじめ、友人故旧相つどい悲しきお別れの式に列し、ありし日のあなたをしのび、参列の皆様とともにご冥福をお祈りしてお別れのことばといたします。

岐阜市長 上松陽助

謹んで勲四等瑞宝章故小木曾旭晃先生のご逝去を悼み、心より愛悼の意を表します。先生は、少年期に不幸にも聴力を失われましたが、その苦難にもめげず、独学をもって刻苦勉励し、二十二才で名古屋の雑誌記者、扶桑新聞記者など歴任のうえ、さらに余力を以って文学雑誌「新文芸」「山鳩」の創刊にあたり、広く天下の文学同好家と交わり、名声をあげられました。明治四十二年には月刊「教育新聞」を編集し、多くの青少年の育成に当り、明治、大正、昭和を通じて三十一年間、文筆をもって社会のためにつくされました。大正九年岐阜日日新聞社に入社後も、身体の障害をよく克服して、編集局長十五年間の要職につかれ、その麗筆は世の人々の心を深く打つものがありました。戦後も先生の健筆は少しも衰えず、昭和二十一年「地方文化」後の「生活と文化」を創刊して、今日誌令三百余号に達するまで、視力の衰えにも屈せず、気力をもって独力でその刊行に一生を貫かれました。これら先生の偉大なる功績に対し、県及び市の文化賞、ヘレンケラー賞などが授けられ、先生勲四等瑞宝章の叙勲の榮に浴されました。折目正しく格調高い先生のお人柄を慕うもの数多く、特にお許しを得て先生の文学碑建設の運びとなるや、賛同する者三千余人岐阜公園景勝の地に、先生の名句「羽つくらふ鶉や篝火の消ゆるころ」の碑は、見事完成いたしました。本年四月八日桜花咲き匂う除幕式には、先生ご夫婦ご出席され、九十二才のご高令とも覚えぬ先生のお元気なお姿をまのあたりに拝しましたのに、今我に忽然として、幽明境を異にしてご逝去されましたことは、誠に痛恨の極みと思ひます。

先生のご生涯は文章報国をもって貫かれ、その業績は郷土の偉大な文化人として、永く後世に郷土の誇りとして語り伝えられます。今慈に、謹んで先生のご霊前に額き、先生のお心を体して、本市の文化の向上につくす決意を誓います。先生安らかにおねむりください。

岐阜日日新聞社社長・岐阜放送社長 杉山幹夫

最後のあいさつを申し上げます。つい半月ほど前小木曾先生には、私たちの会社に明治時代の岐阜日日新聞など、貴重な保存資料をご寄贈くださいました。そのとき当社から先生宅までお礼に向向いたのでございますが、そのときは相変わらずお元気のようにすを拝見しよるこんでいたわけでありました。それが二週間ほどで訃報に接しようとは、こんな悲しいことはございません。先生には身の整理をすでにお考えになり、貴重な新聞をお贈りくださったものと思われまふ。それは新聞をご寄贈いただいてから、急に衰弱が目立ち病床につかれたと聞きます。そしてその日までに身の整理をすっかり終えられていたといひます。奥さまや看護の方たちにも「死期が近づいた、食べものはいらぬ」と告げ、そして眠るが如く、大往生をとげられたことで、その心境がよくわかるのでござひます。先生は十三歳のとき事故で負傷し、全聾となり、さらに目を悪くし二重の苦を身に受けながらも、その苦難を乗り越え独学で文学青年となり、新聞に関係し終戦時までわが岐阜日日新聞の編集局長のポストにありました。今日の岐阜日日新聞を築き上げた偉大な礎石であることは申すにはおよびませんが、それにも増して身体の障害を乗り越えて、人生の金字塔をうち立てられた努力と信念は、われわれ新聞人はもとより、一般の人々もとくと見習わねばならぬことと思ひます。こうした努力に対し先生はヘレンケラー賞、岐阜日日文化賞、県政百年記念賞などたくさんの賞や、表彰を受けておられます。また先生ほど多くの人に親しまれ、愛された方はありません。キョッコウさんという愛称で先生を呼び慕った人がたくさんいます。私もその一人で、いま新聞人としてこよなき相談相手をなくしたことに痛恨の情がにじみ出ております。ながながと頌徳の言葉をつらねることは、先生の趣味でないことは承知しております。また私ども先輩の功德について、喋々しく語ることもさし控えるべきでありましよう。私どもはここに柩の前に深き愛悼の情をもって、そうして限りなき尊敬と感謝の心をもって小木曾旭晃先生の長逝を送る言葉にしたいと思ひます。それではお別れします、安らかにおやすみなさい。

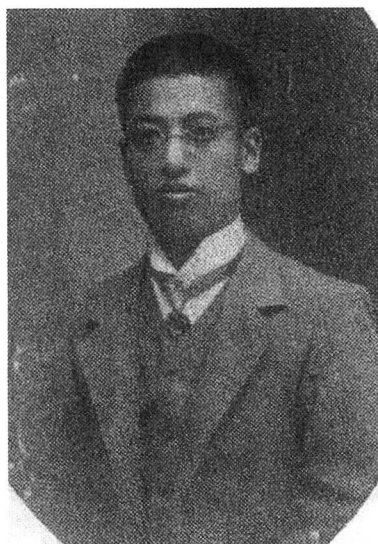
【参考文献】

小木曾旭晃「逆境の恩龍」生活と文化社 S36.1.25

小木曾虎彦「旭晃偲び草」生活と文化社 S50.8.15

聾啞界第62号「岐阜日日新聞主筆聾者小木曾旭晃氏を訪る」川本宇之介

「岐阜県ろう者40年のあゆみ」社団法人岐阜県聴覚障害者協会 H6.1.15



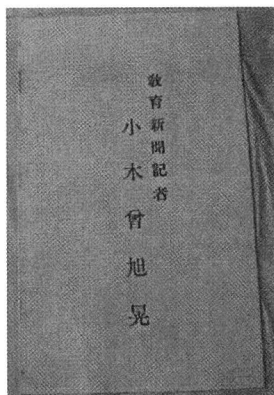
若き小木曾旭晃氏



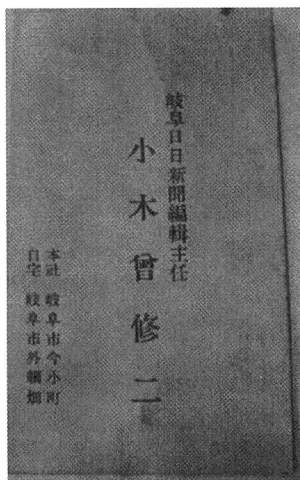
ありし日の小木曾旭晃氏



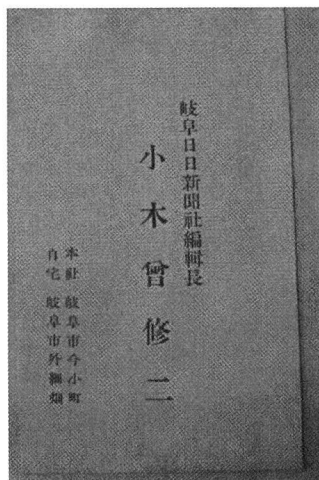
岐阜日日新聞編集局時代



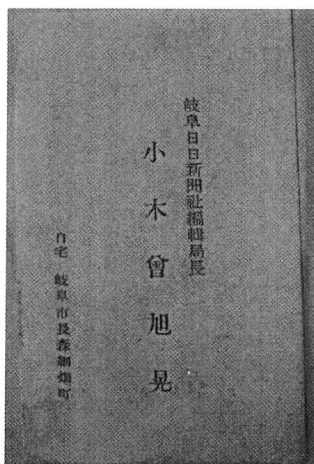
岐阜新聞記者時代の名刺



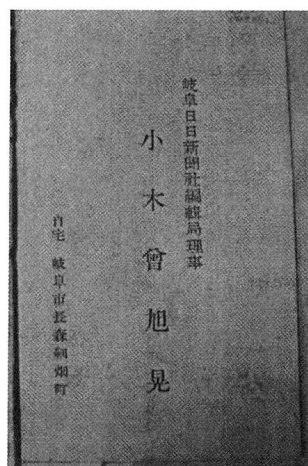
岐阜日日新聞編集主任時代の名刺



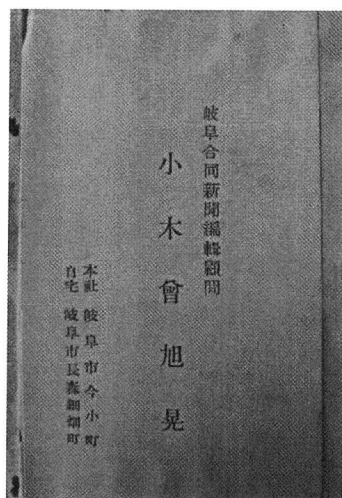
岐阜日日新聞編集長時代の名刺



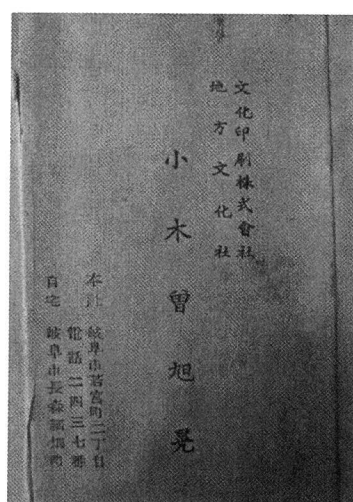
岐阜日日新聞編集局長時代の名刺



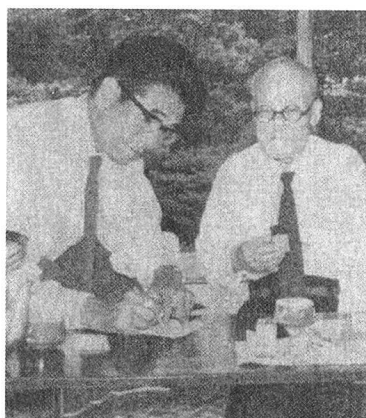
岐阜日日新聞編集局理事時代の名刺



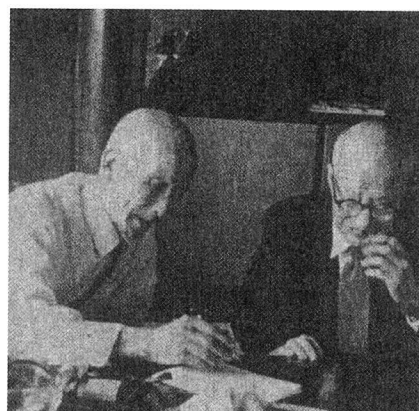
岐阜合同新聞編集顧問時代の名刺



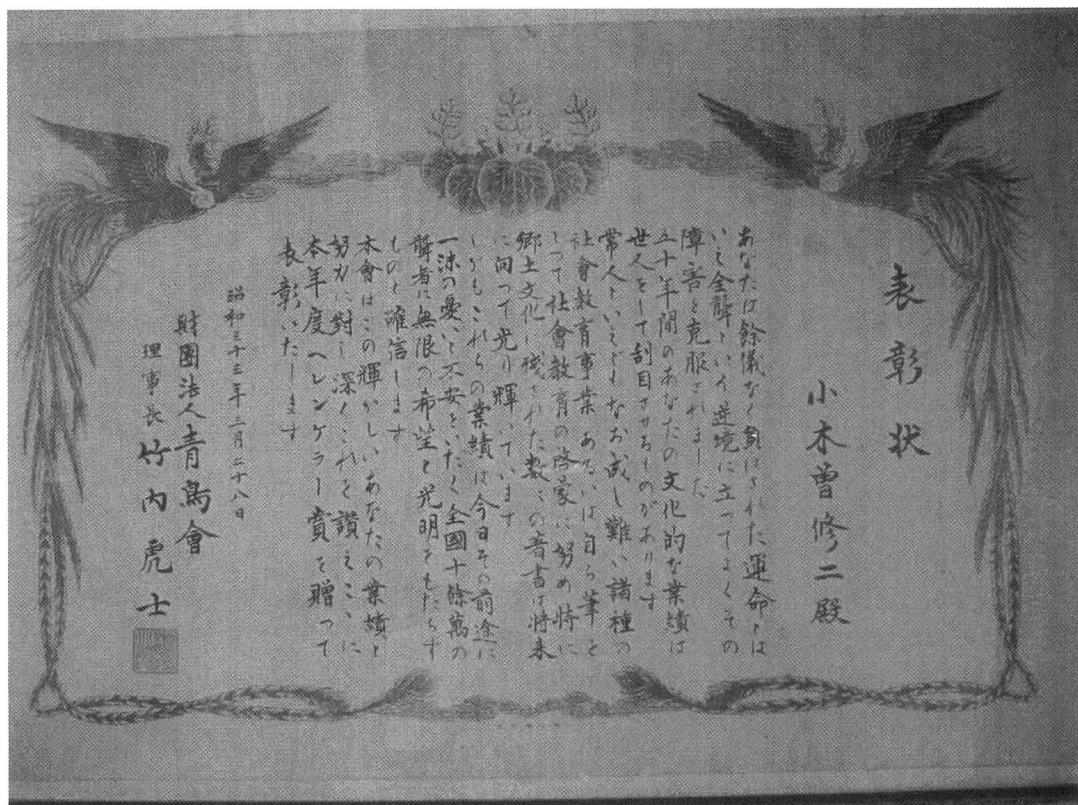
GHQ公職追放後、自営時代の名刺



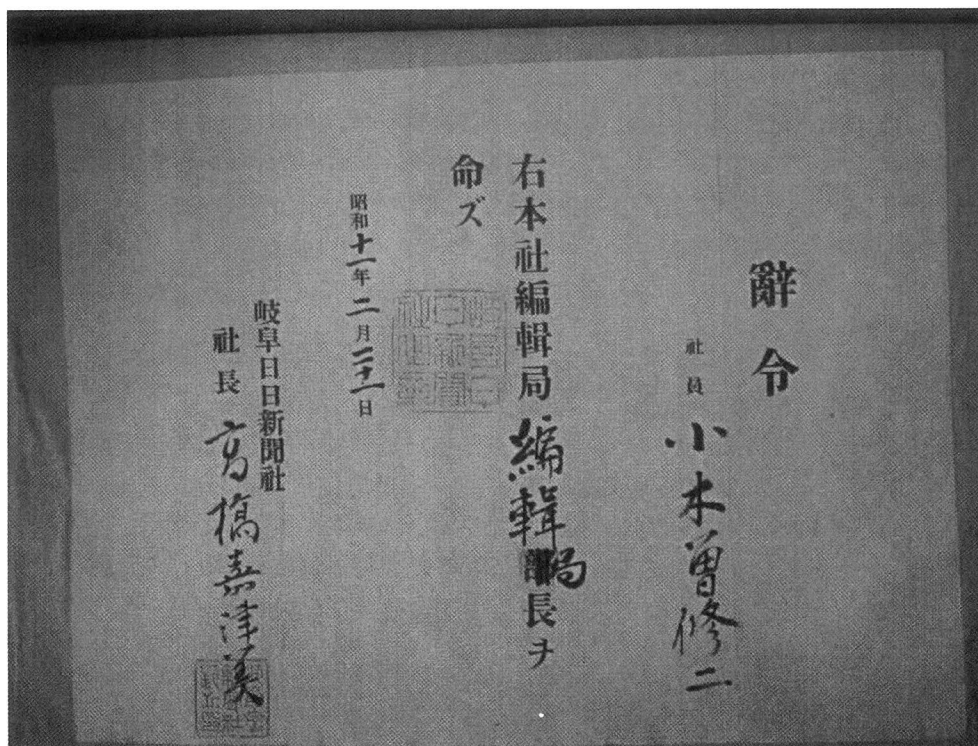
晩年の小木曾旭晃氏（1）



晩年の小木曾旭晃氏（2）



ヘレンケラー賞の表彰状



岐阜日日新聞編集局長辞令